

平成 30 年の漁況

吉田太輔・佐藤勇介・金元保之・内田 浩

1. まき網漁業

(1) 漁獲量の経年変化

図 1 に 1960 年（昭和 35 年）以降の島根県の中型まき網漁業による魚種別の漁獲量の経年変化を示した。

2018（H30）年の総漁獲量は約 7 万 9 千トンで、前年（2017（H29）年、以下同様）比 78%、平年（2013（H25）年～2017（H29）年の 5 ケ年平均、以下同様）比 90%であった。また、CPUE（1 統 1 航海当り漁獲量）は 47.0 トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比 72%、平年比 94%）。2003（H15）年以降、長期的にみると CPUE は増加傾向にある。なお、2018（H30）年の漁労体数は 11 ケ統（県西部 3 ケ統、県東部 8 ケ統）であった。

（1 統 1 航海当り漁獲量）は 47.0 トンで、前年を下回り、平年並みであった（前年比 72%、平年比 94%）。2003（H15）年以降、長期的にみると CPUE は増加傾向にある。なお、2018（H30）年の漁労体数は 11 ケ統（県西部 3 ケ統、県東部 8 ケ統）であった。

本県のまき網漁業の漁獲の主体は、1970 年代後半～1990 年代前半のマイワシから、1990 年代後半にマアジに変遷し、2011（H23）年までは同種が漁獲を支える構造にあった。ところが、2011 年にマイワシの漁獲割合が急増し、以後マアジ、サバ類とともに漁獲を支える主要魚種となっている。魚種別の動向をみると、サバ類（総漁獲量 35%）、マアジ（同 31%）、ウルメイワシ（同 7%）は前年を上回り、マイワシ（同 17%）、

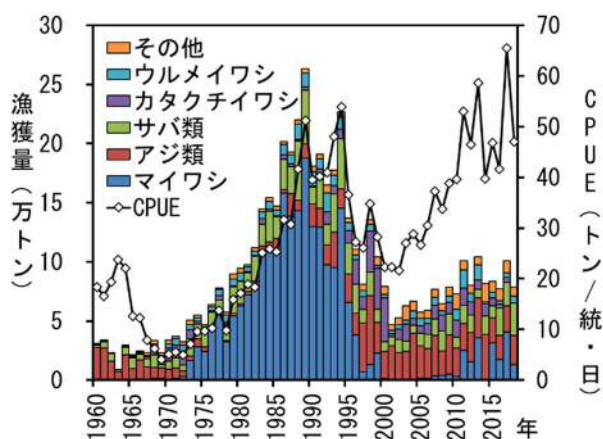


図 1 島根県の中型まき網漁業による魚種別漁獲量と CPUE の推移（2002 年までは農林水産統計値、2003 年以降は島根県漁獲統計システムによる集計値）

カタクチイワシ（同 1%）は前年を下回る漁況であった。

(2) 魚種別漁獲状況

図 2～6 に島根県の中型まき網漁業による魚種別月別漁獲動向のグラフを示した。

①マアジ

2018（H30）年の漁獲量は約 2 万 4 千トンで、前年を上回ったが、平年は下回った（前年比 111%、平年比 89%）。

漁獲の主体は、冬季が 2 歳魚（2016（H28）年生まれ）、春季以降は 1 歳魚（2017（H29）年生まれ）であった。山陰沖ではマアジは春から初夏にかけて、まとまった漁獲があることが多く、4 月～7 月の漁獲量は約 1 万 4 千トンで前年・平年を上回る漁況であった（前年比 132%、平年比 148%）。一方、秋季（9 月～11 月）の漁獲量は約 2 千 6 百トンで不漁であった前年を上回ったが、平年を大きく下回る漁況であった（前年比 185%、平年比 28%）。

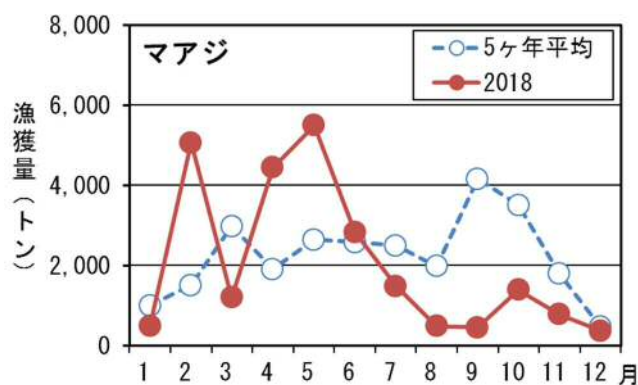


図 2 中型まき網漁業によるマアジの漁獲量

②サバ類

2018（H30）年の漁獲量は約 2 万 8 千トンで、前年・平年を上回り（前年比 140%、平年比 181%）、過去 10 年で最も漁獲が多かった。

漁獲の主体は、冬季がマサバ 1 歳魚（2017（H29）年生まれ）、夏季以降はマサバ 0 歳魚（2018（H30）年生まれ）であった。山陰沖ではサバ類の漁獲

は例年、秋季～翌春が好調であり、4月～9月にかけては低調となるが、本年は4月まで好調な漁獲が続いた。本年の冬季（1月～3月）の漁獲は約1万4千トンで、前年並みで、平年を上回る漁況であった（前年比103%、平年比153%）。また、秋季（10月～12月）の漁獲は約3千5百トンで、前年を大きく上回り、平年並みであった（前年比425%、平年比107%）。

③マイワシ

2018（H30）年のマイワシの漁獲量は約1万3千トンで、前年・平年を下回った（前年比32%、平年比52%）。月別の漁獲動向をみると、県東部を主漁場として3月、6月、9月に漁獲がまとまった。

山陰沖のマイワシ資源は2000年以降低水準期が続いていたが、2011年（漁獲量約2万5千トン）から漁獲が急増した。2012年以降も2014年（同850トン）を除き、約1万5千トン～4万トンの漁獲が続いており、マイワシ資源は回復傾向にあると考えられている。しかし、本年の漁獲量は2014年に次ぐ低い値となっており、今後のマイワシ資源の動向を注視する必要がある。

④カタクチイワシ

2018（H30）年のカタクチイワシの漁獲量は約60トンで、前年・平年を大きく下回った（前年比1%、平年比1%）。2018年は年間を通してカタクチイワシの漁獲がほとんどなく、2月～5月、9月にわずかに漁獲されたのみであった。

⑤ウルメイワシ

2018（H30）年のウルメイワシの漁獲量は約6千トンで、前年・平年を上回った（前年比146%、平年比111%）。月別の漁獲動向をみると、6月～7月、9月にまとまった漁獲があった。近年、ウルメイワシの漁獲は春季と秋季に漁獲が多くなる二峰型の漁獲パターンとなることが多かったが、2018年は近年の傾向と異なり、変則的な二峰型となった。

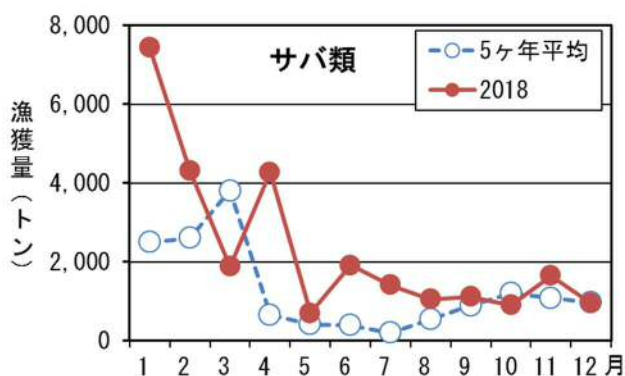


図3 中型まき網漁業によるサバ類の漁獲量

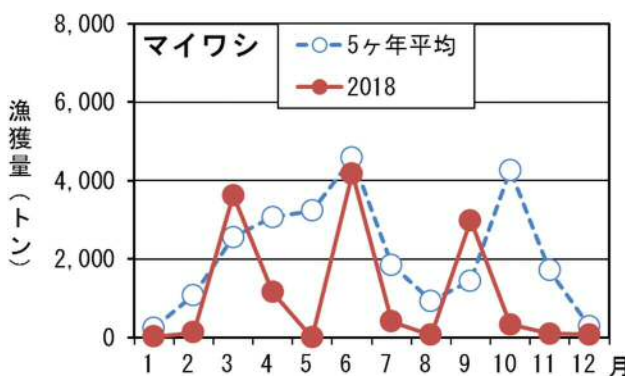


図4 中型まき網漁業によるマイワシの漁獲量

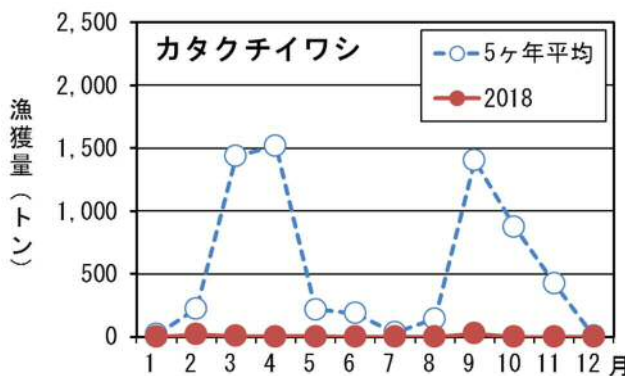


図5 中型まき網漁業によるカタクチイワシの漁獲量

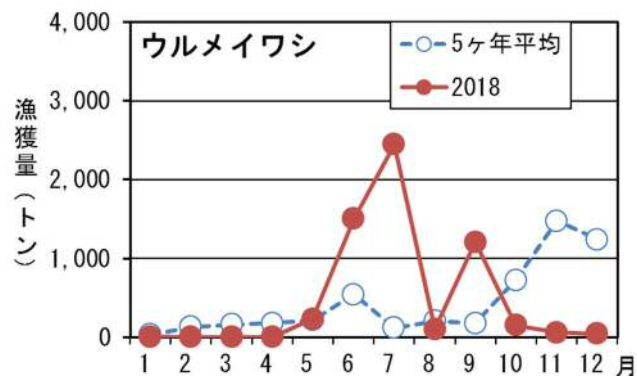


図6 中型まき網漁業によるウルメイワシの漁獲量

2. いか釣り漁業

ここでは、県内外のいか釣り漁船が水揚げするいか釣り漁業の代表港である浜田漁港（島根県浜田市）に水揚げされた主要イカ類（スルメイカ、ケンサキイカ）の漁獲動向をとりまとめた。対象とした漁業は、いか釣り漁業（5トン未満船）、小型いか釣り漁業（5トン以上30トン未満船）および中型いか釣り漁業（30トン以上）である。

(1) スルメイカ

浜田漁港に水揚げされたスルメイカの2013（H25）年以降の水揚量および水揚金額、単価の経年変化を図7と図8に示した。

2018（H30）年の漁獲量は142トンで、前年（37トン）は上回ったものの、平年（435トン）を大きく下回った（前年比386%、平年比33%）。2018（H30）年の水揚金額は約1億6千万円（前年比460%、平年比50%）であった。キログラムあたりの平均単価は555円で、平年（391円）の1.4倍であった。

スルメイカの月別の水揚動向を図9に示した。島根県沖では、例年、冬季～3月は冬季発生系群の産卵南下群が、3月以降は秋季発生系群の索餌北上群が漁獲対象となる。2018年は近年の漁獲の主体であった冬季発生系群の漁獲量が顕著に落ち込み、さらに、5月以降はほとんど漁獲が無い状況にあった。近年は両系群の資源状態が厳しい状況にあり※、さらに山陰沖への来遊量が少ないことが要因と考えられる。

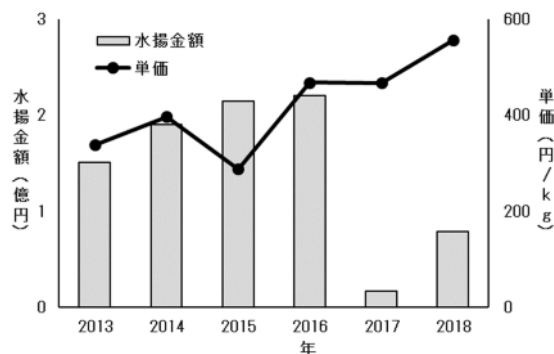


図7 浜田漁港におけるスルメイカの水揚量の経年変化

※水産庁による平成30年度のスルメイカの資源評価では、冬季発生系群の資源水準は「低位」、秋季発生系群の資源水準は「中位」とされている。

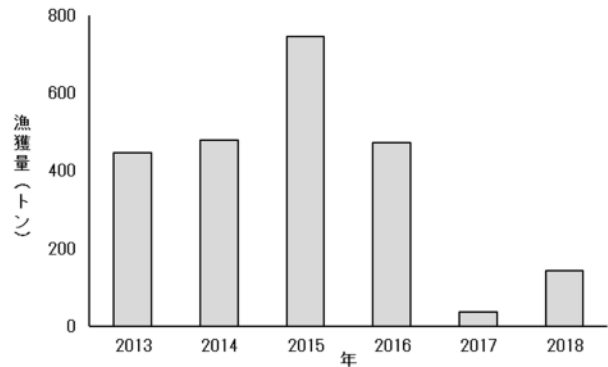


図8 浜田漁港に水揚げされたスルメイカの水揚金額と単価の経年変化

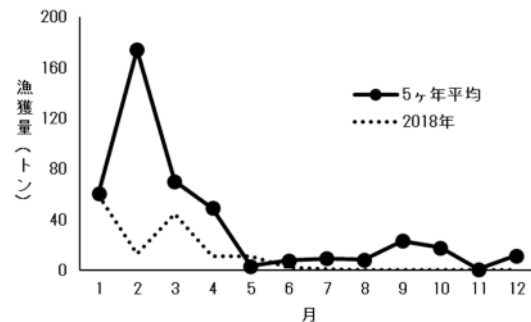


図9 浜田漁港におけるスルメイカの月別水揚動向

(2) ケンサキイカ

浜田漁港に水揚げされたケンサキイカの2013（H25）年以降の水揚量および水揚金額、単価の経年変化を図10と図11に示した。

2018（H30）年のケンサキイカの漁獲量は182トンで、前年（193トン）、平年（336トン）を下回った（前年比94%、平年比54%）。水揚金額は約2億2千万円で、前年並みで、平年比68%であった。キログラムあたりの平均単価は1,226円で、平年（1,022円）の1.2倍程度であった。

ケンサキイカの月別の水揚動向を図12に示した。2018年のケンサキイカ漁は6月中旬から水揚量が増え始め、ケンサキイカ型が主体となる春夏来遊群（5月～8月）の漁獲量は

平年を下回る 58 トン（平年比 65%）、ブドウイカ型が主体となる秋季来遊群（9 月～12 月）も平年を下回る 124 トン（平年比 50%）であった。2006 年以降、春夏来遊群の漁況が不調である一方、秋季来遊群の漁況は好調である傾向が続いていた。しかしながら、秋季来遊群の漁獲量は、2011（H23）年（1,095 トン）をピークに減少傾向にあり、今後の資源動向を注視する必要がある。

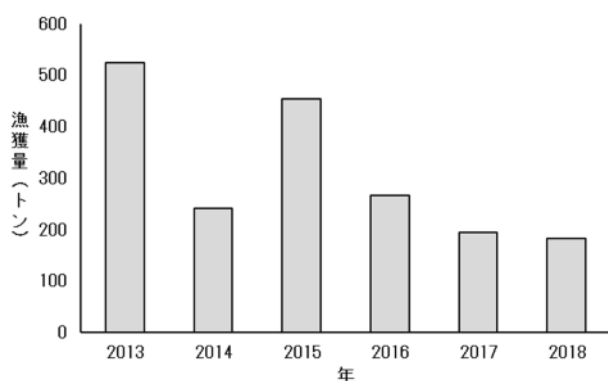


図 10 浜田漁港におけるケンサキイカの水揚量の経年変化

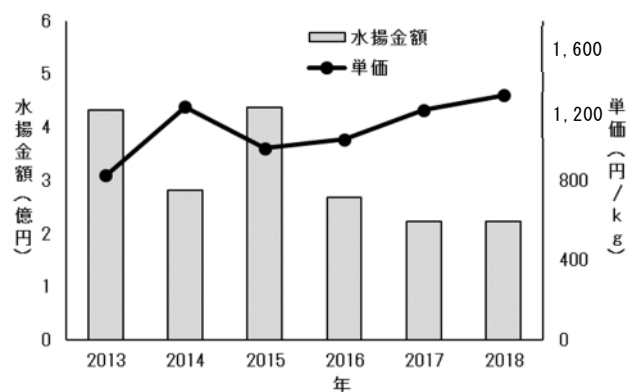


図 11 浜田漁港に水揚げされたケンサキイカの水揚金額と単価の経年変化

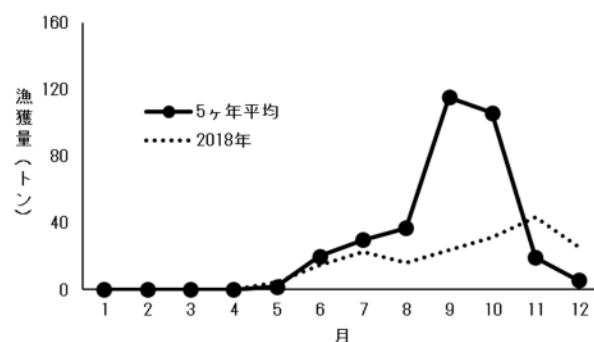


図 12 浜田漁港におけるケンサキイカの月別水揚動向

3. 沖合底びき網漁業（2 そうびき）

本県では現在 7 統が操業を行っている。本報告では、このうち浜田港を基地とする 5 統を対象に取りまとめを行った。ここでは統計上、漁期年を用い、1 漁期を 8 月 16 日から翌年 5 月 31 日までとした（6 月 1 日～8 月 15 日までは禁漁期間）。

(1) 全体の漁獲動向（図 13）

浜田港を基地とする沖合底びき網漁業（操業統数 5 統）の 2018（H30）年漁期（2018 年 8 月 16 日～2019 年 5 月 31 日）の総漁獲量は 3,273 トン、総水揚金額は 14 億 8,885 万円であった。また、1 統当たりの漁獲量は 655 トン、水揚金額は 2 億 9,777 万円で、漁獲量・水揚げ金額ともに平年並みとなりました（過去 10 年平均：617 トン、3 億 45 万円）。

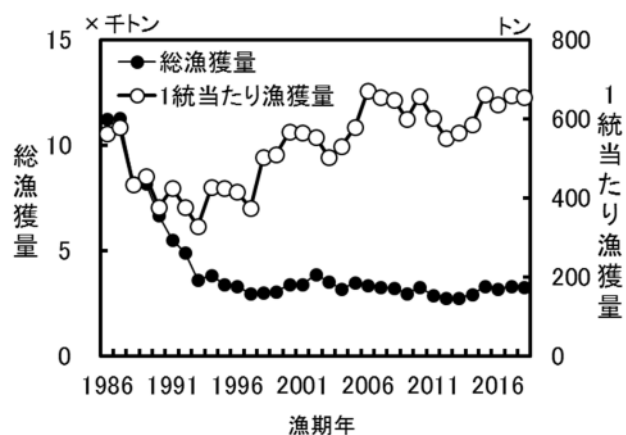


図 13 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における総漁獲量と 1 統当たり漁獲量の経年変化

(2) 主要魚種の漁獲動向（図 14）

① カレイ類

ムシガレイの CPUE は 59 トンで平年の 9 割、ソウハチの CPUE は 51 トンで平年の 1.2 倍、ヤナギムシガレイの CPUE は 14 トンで平年の 1.1 倍の水揚げであった。

② イカ類

ケンサキイカの CPUE は 51 トンで平年の 1.2 倍、ヤリイカの CPUE は 15 トンで平年の 2.1 倍の水揚げとなった。

③ その他の魚類

アナゴ類の CPUE は 53 トンで平年の 1.3 倍、ニギスの CPUE は 7 トンで平年の 4 割の水揚げに留まった。また、アンコウの CPUE は 37 トンで平年の 1.1 倍の水揚げとなった。

アカムツの CPUE は 62 トンで、平年の 1.9 倍の水揚げとなった。

また、マフグの CPUE は 8 トンで、平年の 2 割の水揚げになった。キダイの CPUE は 78 トンで、平年の 1.4 倍の水揚げとなった。

この他、カワハギ類の CPUE は 16 トンで平年の 8 割、マトウダイの CPUE は 14 トンで平年の 9 割の水揚げとなった。

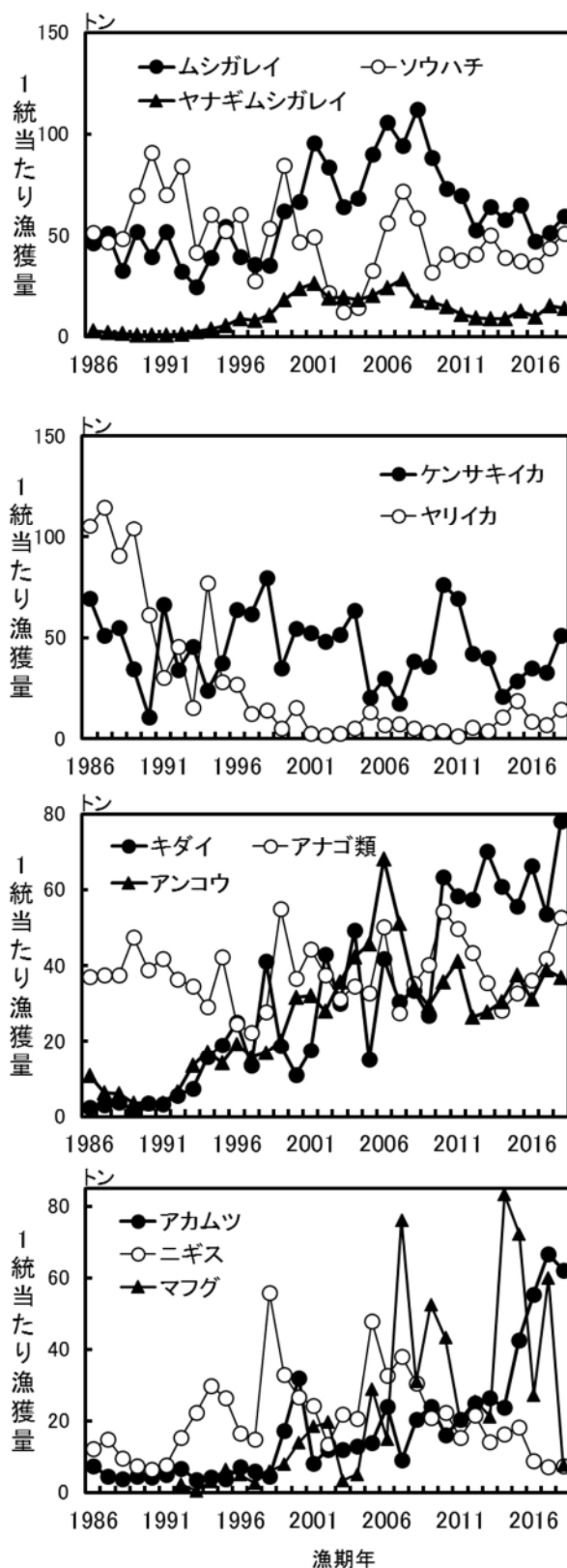


図 14 浜田港を基地とする沖合底びき網漁業における主要魚種の 1 統当たり漁獲量の経年変化

4. 小型底びき網漁業第1種（かけまわし）

小型底びき網漁業1種（以下、小底という）は山口県との県境から隠岐海峡にかけての水深100～200mの海域を漁場とし、現在43隻が操業を行なっている。ここでは統計上、漁期年を用い、1漁期を9月1日から翌年5月31日までとした（6月1日～8月31日までは禁漁期間）。なお、1隻はずわいがに漁業との兼業船で漁期を通して操業を行わないことから、これを除いた42隻分の集計とした。

(1) 全体の漁獲動向（図15）

2018（H30）年漁期（平成30年9月1日～平成31年5月31日）の総漁獲量は3,616トン、総水揚金額は15億7,888万円であった。1隻当たり漁獲量（以下、CPUE）は86.8トン、水揚金額は3,789万円で、漁獲量では平年を14%下回り、水揚金額では平年を6%下回った（過去10ヶ年平均；101.2トン、4,038万円）。

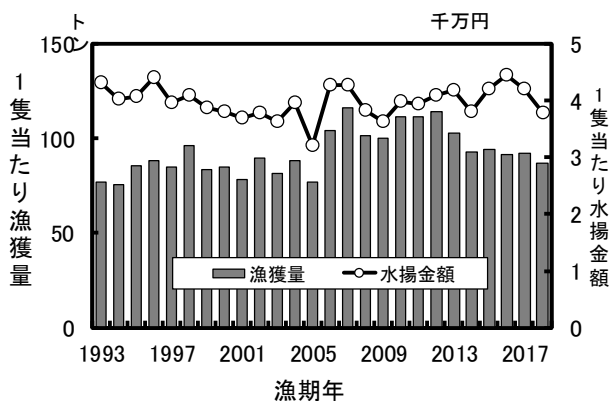


図15 小型底びき網漁業における1隻当たり漁獲量と水揚金額の経年変化

(2) 主要魚種の漁獲動向（図16）

①カレイ類

ソウハチのCPUEは15.8トンで、前年の9割で平年の8割の水揚げとなった。ムシガレイのCPUEは2.7トンで前年の1.1倍で平年の8割であった。このほか、ヤナギムシガレイのCPUEは0.9トン（平年の6割）、アカガレイのCPUEは6.4トン（平年の1.4倍）、ヒレグロのCPUEは6.3トン（平年の8割）であった。

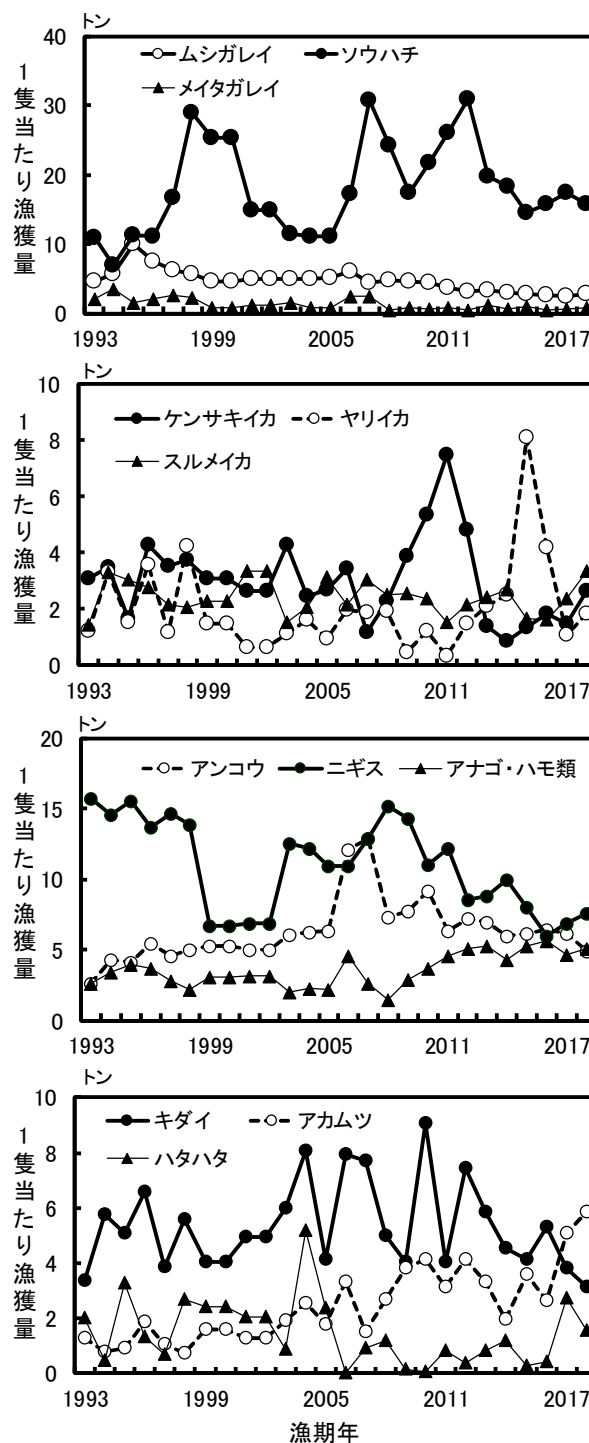


図16 小型底びき網漁業における主要魚種の1隻当たり漁獲量の経年変化

②イカ類

ケンサキイカのCPUEは2.6トンで、前年の1.8倍、平年の9割の水揚げであった。ヤリイカのCPUEは1.8トンで前年の1.7割、平年の8割であった。

③その他の魚類

アカムツの CPUE は 5.8 トンで、前年の 1.2 倍、平年の 1.7 倍の水揚げであった。このほか、キダイの CPUE は 3.1 トン(平年の 6 割)、ニギスの CPUE は 7.6 トン (平年の 8 割)、ア

ンコウの CPUE は 4.9 トン (平年の 7 割)、アナゴ類の CPUE は 5.1 トン (平年の 1.2 倍) の水揚げであった。

5. ばいかご漁業

石見海域におけるばいかご漁業は、小型底びき網漁業(第 1 種)の休漁中(6~8 月)に行われる。漁場は本県沖合の水深 200m 前後、2018 年は 3 隻が操業した。

解析に用いた資料は、当センター漁獲管理情報処理システムによる漁獲統計と各漁業者に記帳を依頼している標本船野帳である。これらの資料をもとに、漁獲動向、漁場利用等について検討を行った。なお、漁獲量および水揚げ金額の 8 割程度占めるエッチュウバイについては、p 27 のエッチュウバイの資源管理に関する研究を参照のこと。

(1) 漁獲動向

2018 (H30) 年のばいかご漁業における総漁獲量および総水揚げ金額は 58 トン、3,157 万円と非常に低水準となった(図 17)。

1989 (H01) 年は 150 トンを越える漁獲量であったが、徐々に減少し 2009 (H21) 年以降は 100 トンを下回っている。漁獲量減少の原因としては、操業隻数の減少等が考えられ、1990~2000 年代では 6~7 隻が操業していたが、2016 (H28) 年以降は 3 隻のみの操業となっている。2017 (H29) 年および 2018 (H30) 年については、操業日数の減少により漁獲量は低下した。

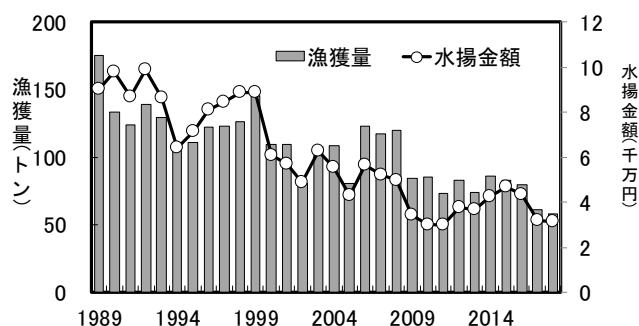


図 17 石見海域におけるばいかご漁業の漁獲量と水揚げ金額の推移

水揚げ金額も漁獲量の減少に伴い低下している。1989 年から 2009 年では漁獲の大部分をしめるエッチュウバイの価格が低下しており、その影響も大きい。なお、2009 年以降は僅かながらエッチュウバイの単価の向上が見られている。

1 隻当たりの漁獲量および水揚げ金額は 19.3 トン、1,052 万円であった(図 18)。

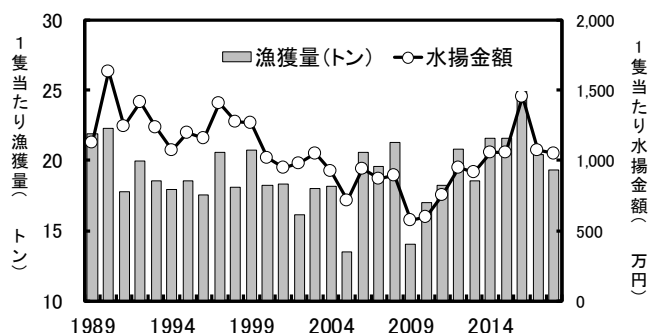


図 18 石見海域におけるばいかご漁業の 1 隻当たり漁獲量と水揚げ金額の推移

1 隻当たり漁獲量は、1989 (H01) 年以降 20 トン程度で推移している。2005 (H17) 年、2009 (H21) 年は大きく減少しているが、2010 (H22) 年以降は増加傾向が見られる。2017 (H29) 年および 2018 (H30) 年の減少は、操業日数の減少と考えられる。

1 隻当たりの水揚げ金額は、1989 (H01) 年から 2010 (H22) 年にかけて減少傾向がみられるが、近年は増加している。これはエッチュウバイの単価の上昇の結果と考えられる。